

論文

映画「Садко (サトコー)」とサトコーのブイリーナ (2)¹ The Russian movie “Sadko” and bylinas about Sadko (2)

水上 則子²
MIZUKAMI Noriko

キーワード: ブイリーナ、サトコー、プトウシュコ
Key words: bylina, Sadko, Ptushko

3 映画の中のサトコー (続)

3-6 場面⑤:ノヴゴロドの商人たちと賭けをする ⑦:湖で金の羽を持った魚三匹を得る

場面⑤では、サトコーがノヴゴロドの鐘を打ち鳴らすと、人々は「民会だ、仕事はそこまでだ」と声を掛け合っ
て集まってくる。サトコーは、勝手に民会を召集したことに怒った大商人に処刑されそうになるが、民衆の支持
を得て発言を許され、次のように言う。「Слушайте меня, люди вольные! С добрым словом шел я к Новгороду,
славы хотел ему добыть. Насмеялись надо мной гости торговые. Не верят мне ни в чем. А я говорю пред
всем народом: как взойдет солнце, закину я невод в Ильмень-озеро и изловлю чудо-рыбу золото перо. (自
由な民よ、聞いてくれ! 私はノヴゴロドのためになる話を持って来たのだ、名誉になるようにと。商人がたは私を
あざ笑った。私をまったく信じてくれない。でも私は皆さんがたの前で言おう、太陽が昇ったら、イリメニ湖に網
を持っていき、金のひれを持った不思議な魚を捕まえよう)」³そして、信じようしない商人に向かって賭けを申
し入れる。サトコーの言うとおり魚が獲れたら、商人たちが商品を、取れなかったら、サトコーが首を差し出すと
いう条件である。商人たちは同意し、民会はその証人となる。

中世のノヴゴロドにおいて「民会」が重要な役割を果たしていたことは史実であるが、本稿で対象としている
ブイリーナ 27 編の中に、「民会」が登場することはない。また、2-1 で述べたように、本稿は「ノヴゴロドのブイリー
ナ」所収の「サトコー」を分析対象としているのだが、同書に収録されている「サトコー」以外のブイリーナ 46 編
(Василий Буслаев のブイリーナ 26 編、Хотен Блудович のブイリーナ 16 編、Скоморохи のブイリーナ 4 編)
の中にも、民会の場面は一切描かれていない。オペラにも民会への言及はなく、映画製作者の思いつきによって
取り入れられたものと結論してよいであろう。

⑤に続く場面(⑥)は後述することとし、この賭けの直接の結果である場面⑦を検討する。ここでは、商人たち
や民衆が見守る中、サトコーが湖上で網を投げる。1回目・2回目は空振りだが、3回目にイリメニ姫が魚を網に
入れ、約束通りの金色の魚を引き上げたサトコーは勝者となる。民衆はサトコーを英雄のように迎え、サトコー
は商人たちから得たものを人々に気前よく分け与える。

サトコーのブリーナの中にも、「賭け」の場面は登場するが、そこで争われるのは「ノヴゴロドの商品を買い占めることができるかどうか」であることが多い。サトコーのブリーナにおける賭けもしくは買い占めのモチーフについてまとめると、以下の通りである。

No.	賭けもしくは買い占め	結末
27	1) 海の王に指示されて金のひれの魚の捕獲を賭ける 2) 商品を買占めると自慢し、修道院長に賭けを申し込まれる	1) サトコーが勝ち、商品を得る 2) サトコーが負け、賭け金を支払う
28	1) 水の王に指示されて金のひれの魚の捕獲を賭ける 2) 商品を買占めると自慢し、修道院長に賭けを申し込まれる	1) サトコーが勝ち、商品を得る 2) サトコーが負け、賭け金を支払う
31	サトコーが買い占めを宣言する	失敗し、罰金を支払う
32	湖から登場した царица Белорыбница(白魚姫?)に「賭けをしなさい」と言われる	賭けは行われていない。白魚姫の指示で獲った金の魚を商人たちが買い、サトコーは財を得る
33	サトコーは従者に買い占めを命じる	買い占めに成功する
34	サトコーが買い占めを宣言し、「失敗したら頭を差し出す」と言う(相手は明示されない)	買い占めに成功する
35	サトコーが買い占めを宣言する	失敗するが、罰はない
36	サトコーが買い占めを宣言し、「失敗したら頭を差し出す」と言う	失敗するが、頭を差し出さず船出する
37	サトコーは12隻の船で訪れ、買い占めようとする	失敗して6隻の船で帰る
38	サトコーは商品の運び出しを企図し、聖職者が否定して賭けを申し込む	サトコーは祈りによって買い占めに成功する。敗者の罰は描かれない
39	サトコーが買占めを自慢する。聖職者が否定して賭けを申し込み、首を賭ける	サトコーは祈りによって買い占めに成功する。敗者の罰は描かれない
40	サトコーが買占めを自慢する。聖職者が否定して賭けを申し込み、首を賭ける	サトコーは祈りによって買い占めに成功する。敗者の罰は描かれない
41	サトコーが買い占めを宣言し、「失敗したら頭を差し出す」と言う(相手は明示されない)	サトコーは祈りによって買い占めに成功する
48	サトコーが買い占めを宣言する	(不明)
49	サトコーが買い占めを宣言する	(不明)
50	サトコーが買い占めを宣言する	成功する
53	サトコーが買い占めを宣言する	(不明)

表2 サトコーのブリーナにおける「買い占め」と「賭け」

本稿で対象としているブリーナ 27 編のうち 12 編(No.29, 30, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 51, 52)には、買い占めも「賭け」もみられなかった。どちらかが存在している 15 編の中で、「金の魚」が登場するのは、No.27, 28, 32 のみである。この 3 編は、2-2 において述べたように、かなり特異な作品であって、「金の魚」のモチーフも、27・28 の歌手であるソーキン⁴の創作である可能性が高いとされている⁴。このように、場面⑤と⑦の中で、ブリーナの伝統に由来すると言えるのは「首を賭ける」という部分のみである。

また、「賭け」が成立するためには、ある程度同等の価値のものを出し合う必要がある。「貧しいグースリ弾き」(この設定もまた、No.27, 28, 32 のみで見られるものだが)の「頭」と、ノヴゴロドの豪商の財産との間の価値の差は大きく、不自然だと言わざるをえない。映画においては、豪商たちのサトコーへの憎しみが強調され、賭けの動機となったように描かれているが、この不自然さを解消することには成功していない。

表2に示したように、ブリーナのサトコーが「賭け」を行う場合、その内容の大半は「商品を買占められるかどうか」である。この場合のサトコーは「豪商」であって、自分には無尽蔵の富があるので、ノヴゴロドの商品を買占めてみせる、と豪語することが多い。まれに、ツェリグラードやモスクワに言及されることもあるが、大多数は「ノヴゴロド」である。商業の街として繁栄をきわめたノヴゴロドの商品を買占めるほどの財力、という誇張法から生まれたモチーフであろう。上述のように、No.27, 28 では「金の魚」をめぐる賭けが歌われているのだが、同じ作品の後半では「買占め」をめぐる賭けも行われている。金の魚をめぐる賭けは、買占めをめぐる賭けをヒントとして生まれたものと思われるが、置き換えるのではなく、追加する形になっているのは、ソローキンも後者のエピソードを重要なものだと感じていたからではないだろうか。

ただし、「買占め」が登場するブリーナ 16 編のうち、「賭け」が明示されているものは、わずか 5 編である。つまり、主眼は「賭け」にあるのではなく、「買占め」のほうにある。しかも、歌い手の関心は、その成否にはあまり向けられていないように思われる。16 編の中で、買占めに成功しているものが 7 編、失敗しているものが 6 編と拮抗しているだけでなく、結果が明示されないものも散見されるほどである。失敗によって窮地に追い込まれたり、成功することが次の展開に不可欠であったり、という場合もほとんどなく、非常に目立つモチーフであるにもかかわらず、筋の中での意味は大きくなく、一種の装飾のような役割にとどまっていると言えよう。

3-7 場面⑥: 船出を志願する者を試し、合格者を仲間に入れる

場面⑤の終わり近く、サトコーが「誰が一緒に行くか?」と呼びかけると、人々が口々に名乗りを上げる。サトコーは次のように言う。「Не рыбу ловить зову вас, за счастье поплывем. Не дешево это дастся, не у каждого силы хватит. Кто искус пройдет, тот и пойдет со мной. (魚獲りに行くためじゃない。幸せを探しに船出するんだ。簡単ではない、誰でもできることじゃない。一緒に行けるのは試練に耐えられる者だけだ)」⁵ 人々はこれに「わかった、試してくれ」と答え、⑥では、旅に出る仲間の選抜が行われる。「試験」の内容は、「酒が飲めるか」と、「殴り合いに耐えられるか」で、長い列を作った男たちに大きな樽から酒を飲ませる。中には、力を示すために熊と取っ組み合いをする者が現れるなど、華やかに演出されている。

しかし、この「選抜」も、ブリーナにもオペラにもまったく登場しておらず、映画における創作部分と思われる。皇女の約束があるとはいえ、船出が具体化しているわけではないのに「仲間」を募ること、船出の目的が明示されていない以上、参加したいと考える者も、参加が可能な者もきわめて限定される(男たちの多くは貴重な働き手であって、報酬も不明な長旅に出ってしまったら、家族が困窮するはずである)と思われるのに、希望者の長蛇の列ができること、まだ無一文であるはずのサトコーが、安価ではないと推測される大きな酒樽を容易に入手していることなど、さまざまなレベルで多くの疑問を感じざるを得ない場面でもある。

3-8 場面⑦: 商人たちの商品を民衆に分け与え、民衆は喜ぶが、仲間に諫められて反省する

場面⑦の終わりで、賭けに勝ち、商人たちから店の鍵を受け取ったサトコーは、⑥で仲間となった者に鍵を与えながら、次のように言う。「Получайте ключи от лавок с товарами! Добывайте стрелы, мечи острые, надевайте мятели новые. Были вы голь перекаточная, стали бранный люд. Шелков не жалеите, ни камки, ни бархата. Всё под ноги люду неимущему мечите. (品物がある店の鍵を受け取れ! 矢や、鋭い剣を手に入れ

るのだ、新しいマントを着るのだ。お前たちは貧民だったが、武人になったのだ。絹も緞子もビロードも惜しむな。貧乏な者たちの足元に撒き散らせ)」⁶この言葉から明らかなように、映画のサトコーは、賭けに勝って得たものを旅立ちの資金にしようとしていない。仲間たちには(「武人」になるために)「矢、刀剣、マント」を取らせた後、ノヴゴロドの人々(おそらく)高価な品物を分け与えるだけである。この気前のよい宣言に喜びの声が上がり、それに続く⑧の冒頭では、陽気な音楽が流れ、街が踊る人であふれる、という情景が描かれる。次にサトコーは、その輪に加わらないトリーフォン(⑥では特別扱いを受け、試験なしで仲間になった老人)に声をかけ、次のような会話をかわす。「А вот ты не рано ли загордился? (手柄顔をするのは早すぎるんじゃないのか?)」「А отчего ж не погордиться мне? Погляди, как народ веселится. Оделись, обулись, сыты все. (どうして手柄ではないんだ? 見てみる、みんな喜んで。いい服を着て、いい靴をはいて、みんな満腹だ)」「Все ли сыты? Ты получше погляди вокруг, оглянись. (みんな満腹だって? もっとよく見まわしてみろ、ほら見てみる)」「Что это? (あれはなんだ?)」「Народ, голь. Роздал ты лавки, роздал товар красный, все роздал, что имел. А счастье дал немногим. На чем теперь поплывешь за счастьем? (貧乏人だよ。店だの、立派な品物だの、お前さんが持っていたものを全部分けてやった。でも幸せをもらった者は少しだけだ。幸せを探す航海の資金はどうするんだ?)」「Забыл я про корабли. Хотел сразу людям счастье дать. (船のことを忘れていた。みんなをすぐに幸せにしたかったんだ)」「Ан не вышло. (そうは行かなかったのさ)」「⁷⑦と⑧では、サトコーの行動を通じて、彼の気前のよさや、人々を幸せにしたいという願いの強さなどを表そうとしていると思われる。しかし、「船のことを忘れていた」というのはあまりに愚かで、せつかく描き出した長所が台無しになっている。

「賭けで得た財を貧しい人に分け与える」「財を得た人々が喜んで踊る」という場面も、トリーフォンという人物も、従って彼の諫言も、それを聞いてサトコーが反省することも、すべてプリーナには全く見当たらず、映画のオリジナル要素といえる。その中で、商人たちの財の分配の結果として、「一見『すべての』人々を喜ばせたようだったが、分配に与れなかった者が現れ、『すべての』人を幸せにすることは不可能だと悟る」ところは、3-6 で述べた「買い占め」の失敗(どれほど豊かな財を持っていても、町全体を買い占めることはできない)の、いわば裏返しになっており、プリーナをふまえて作られたエピソードであるかもしれないが、その場合でも、関連はかかなり薄いと云わざるを得ない。

3-9 場面⑨:リュバーヴァと逢引し、旅立ちの決意を語る ⑩:皇女が金の魚を黄金に変え、サトコー一同は旅立ちの支度をする。リュバーヴァに再会を誓い、商人たちとは和やかに別れ出発

3-2 で述べたように、リュバーヴァという乙女がサトコーと恋愛関係になる、という設定は、映画に独自のものである。従って、場面⑨全体と、⑩でリュバーヴァが登場する部分は、すべて映画のために案出されたものである。

場面⑩では、サトコーが旅の資金がないことに苦悩しているのを見て、イリメニ姫が⑦で捕獲した魚を金の山に変える。このシーンでは、サトコーと姫は顔を合わせないのだが、姫はサトコーの様子を察知している。姫には超人的な力があるのだとしても、サトコーが奇跡を目にするや否や姫に感謝するのは、姫の行為だということは何らかの方法で知ったからであろうが、それについての説明は省かれている。また、この「奇跡」を姫が起こすのは、サトコーの旅立ちを助けるためであることはわかるのだが、ここで魚を金塊に変えることで、場面⑤においてサトコーが商人たちと行った賭けが無意味になってしまっている。

サトコーは金塊を見て次のように言う。「Братья мои, просыпайтесь! Смотрите, богатство какое! Черпайте из челна золото, бегите-ка к пристани. Зовите мастеров умелых. Пусть строят кораблики крепкие да выносливые. Бока чтоб змеиные были. Нос, корму пусть по-звериному выводят! Не мешкайте, дружиннички! Зовет нас синее море! (兄弟たちよ、起きろ! 見てみる、すごいお宝だ! 舟から金(きん)を引き

出せ、波止場へ走れ。工匠たちを呼べ。しっかりした頑丈な船を作らせるんだ。船腹は蛇のように、船首と船尾は獣のように作らせる！ぐずぐずするな、従士たちよ！われらを青い海が呼んでいるぞ！」⁸この台詞の中でブリーナに由来すると思われるのは、船についての「船腹は蛇のように、船首と船尾は獣のように作らせる」という部分である。サトコーのブリーナ 27 編の中で、船の外見に言及しているのは No.33 のみだが、次のように歌われている。「Тут его дружинишка хоробрая / Строила кораблики великие: / На корабликах снасточки шелковые, / Кормы-то писаны по-звериному, / А нос-то писан по-змеиному; (そして彼の勇ましい従者は / 巨大な船々を建造した / 船の策具は絹で / 船尾は獣のように描き / 船首は蛇のように描く)」(No.33, 139-43) 映画はこの表現をとりいれたと見られ、サトコーの台詞と共に、船の姿が映し出される⁹。

No.33 におけるこの描写について、「ノヴゴロドのブリーナ」解説では、「ブリーナに特徴的なものではない」「オネガ地方で人気のあったブリーナ『ソロヴェイ・ブヂミールヴィチ』から持ち込まれたものである」¹⁰としている。その言葉通り、この描写は、「ノヴゴロドのブリーナ」所収の他の作品の中にも見られず、No.33 の一例のみである¹¹。「サトコー」以外のブリーナ、あるいはノヴゴロド以外の地域のブリーナの中にもあまり例がなく、珍しいものといえる。

場面⑩はサトコーの旅立ちで終わるが、サトコーのせいで財産を失い、貧乏人になったはずの商人たちが、以前と変わらぬ様子で登場するだけでなく、サトコーの旅立ちに際してサトコーに詫言、許しあって和やかに別れる、と描かれていることにも無理が感じられる。オペラ「サトコー」には、1)サトコーが商人たちに「イリメニ湖で金のひれを持つ魚を捕まえてみせる」と挑み、賭けを行う 2)商人たちには商品を賭けさせ、自分は首を賭ける 3)サトコーは魚を獲り、賭けに勝ち、商人たちは自分たちが貧乏になったことを嘆く 4)姫(オペラではヴォルホヴァ)が魚を金塊に変える 5)サトコーと商人たちは和解する など、多くの共通した出来事が描かれているが、オペラでは、金の魚はすぐに金塊に変わり、サトコーはこの金塊を資金として旅の支度を整えるので、商人たちの財産には手をつけない。このため、出発に際して商人たちとの関係が修復できることも理にかなっている。また、オペラのこの場面では、姫は姿を現さないが、声がとこところで流れ、彼女の意思によって奇跡が起こされていることを明示している。このように、オペラでは自然な流れを作っていた要素を、映画ではわざわざ不自然に並べ替えている、と言わざるを得ず、説得力を犠牲にしてこのように変更することにはいかなる理由があったのか、理解に苦しむところである。

3-10 場面⑪: 荒れた海岸で好戦的な一団と戦い、馬を戦利品として得て引き上げる ⑫: インドでフェニックスを手に入れようと試みる

映画の中でサトコーの旅の行き先は明示されておらず、訪問地の地名が具体的に挙げられることもないが、一行の上陸と行動が描かれる場所が二箇所ある。場面⑪の舞台となっている、ヴァリヤグ(ヴァイキング)の支配する土地(荒れた海岸)と、場面⑫~⑭の舞台となっている、インドと思われるアジアの街である。そのほかに、船の背景としてピラミッドや富士山を思わせるものが映し出されるシーンもあり、長期間・長距離の旅となっていることを示している。

サトコーの旅の行き先が明示されないのはブリーナも同様である。わずかな例外として、「воротил он в Золоту орду(金帳汗国へ立ち寄った)」(No.27, 28)(ちなみにこれは具体的な地名が出てくる希少な例だが、海路で行くには無理がある場所である)、「Он пошел-то на черных все на караблях, / Торговать-то он пошел да все ведь в разны города(黒い船で出発した / 商売のために、さまざまな街へ)」(No.32)などがあるものの、ほとんどの場合、サトコーが「海に出る」場面でも、どこへ行くかが示されることはない。また、海の底からノヴゴロドに戻ってくる以外の「上陸」が描かれることもない。

映画の二つの上陸場所は、オペラに着想を得て選ばれたものと考えられる。オペラ「サトコー」では、金の魚をめぐる賭けと前後して、商都ノヴゴロドにやってきた異国の商人たちを町の人々が歓迎する場面が描かれる。

賭けに勝利したサトコーの求めに応じて、ヴァリヤグの商人、インドの商人、ヴェネチアの商人が、それぞれ自分の土地を物語るアリアを歌う。この三つのうちで「インド」だけはブリーナにも歌われる土地である。ブリーナの中でヴァリヤグやヴェネチアが言及されることはほとんどないが、インドは、特に Дюк のブリーナにおいて、主人公の出身地、途方もなく豊かで贅沢な生活をしている土地として登場する¹²。ただし、地理的な認識(ロシアから見てどの方向で、どのくらいの距離があったか、など)や、実際にどのような土地であったかの知識は不確かで、あくまでも伝説の土地であつたらしい。サトコーのブリーナに限ると、No.35 のサトコーは「インドの豪商」で、ノヴゴロドにやってきて商品を買ひ占めようとする事になっている。(オペラの分析は本稿の目的ではないが、「インドの商人がノヴゴロドに来る」という部分は、あるいはこのブリーナをヒントにしているのかもしれない。)オペラでは、三つの土地の歌の中で最も好感を得たのはヴェネチアで、ノヴゴロドの人々はサトコーに向かって口々に「ヴェネチアへ行くといい」と勧めるが、オペラの中には、サトコーがどこかを訪れるという場面はない。

映画では、三箇所のうちヴェネチアを省いて、ヴァリヤグとインドを利用している。オペラとは異なって、彼らがノヴゴロドに来るのではなく、サトコーの一行が上陸して冒険を繰り広げる、という形に発展させているが、ブリーナとの関連という観点からは、オペラよりもさらに大きく離れていることになる。強いて言うならば、映画の中の「インド」の情景が荒唐無稽であることは、ブリーナの中での「インド」の空想性を踏襲しているのかもしれない。場面⑫は、インドの王が不思議な鳥「フェニックス」を所有していることが分かり(ちなみにオペラでも、インド商人のアリアの中にフェニックスは名前だけ登場している)、サトコーがノヴゴロドの民衆に語った「幸せの鳥」ではないか、と考えた一行が、王に接触しようとするところで終わる。なお、ブリーナには、白鳥やカラス、鳩など、さまざまな鳥が登場することがあり、人間とも鳥ともつかない Соловей Разбойник(怪盗ナイチンゲール)のような形象もよく知られているが、フェニックスが登場することはない。

3-11 場面⑬:インドの王と勝負し、勝つ

場面⑬では、王は馬に目がないという情報から、サトコーたちはヴァリヤグとの戦いで獲得した馬を見せて、鳥と交換しようと持ちかける。王は交換ではなく両方を獲得したいと考え、チェスの勝負を行い、勝ったほうが両方を得る、という提案を行う。サトコーは王との勝負に勝ち、鳥のいる部屋へ通される。

異国の王とゲームで勝負する、というモチーフはブリーナに多く見られるものである。特にしばしばゲームを行うのはミハイル・ポティクだが、イリヤ・ムーロメツやドブルーニヤが行っていることもある。ゲームは шахматы あるいは шашки と呼ばれており、現代ロシア語では前者はチェス、後者はチェッカーをさすが、ブリーナの歌い手たちが厳密に区別していたかどうかは不明である。ブリーナの中では、異国へ滞納された貢税を集めに行き(「納めに」という場合もあるが)、納税の代わりに勝負を申し込まれて応ずることが多い。このように、何らかのものを賭けてゲームで勝負する、という場面自体は、ブリーナの伝統に忠実なものだと言いうことができるが、映画のインド王はここで「Сыграем в тавлеи золотые。(黄金の тавлеи で勝負をつけよう)」¹³と提案している。上述のように、勝負をつけるときに使われるものを表現する語は、ほとんどの場合、チェスもしくはチェッカーであつて、тавлеи という語がブリーナで用いられることは稀である。その稀な例のひとつとして、サトコーのブリーナ No.42 があるが、サトコーが海底へ赴く際に、グースリと一緒に持って行く物として挙げられている¹⁴。このように、使われる場面は大きく異なっているものの、映画で тавлеи という語を使っている理由は、No.42 のブリーナに帰るのが妥当であろう。場面の違いは、サトコーのブリーナには、海の王以外の、異国の王というものの登場はないので、サトコーがゲームで勝負をつける、という場面もないことから、当然ともいえるものである。

なお、тавлеи という語には複数の解釈がある。露和辞典には тавлея という形で収録され、「1.(昔の)さいころ遊び用の盤; その遊び 2.さいころ、ダイス」¹⁵といった語義が与えられており、ダーリの詳解辞典でもほぼ同様の説明が行われている¹⁶が、「ノヴゴロドのブリーナ」巻末の「方言・古語」の項では、「Тавлеи — шашки или

шахматные фигуры. (チェッカーまたはチェスのコマ)」と説明されている¹⁷。また、方言辞典には「Тавлеи」という複数形で収録され、「Игральные кости. (ゲーム用のサイコロ)」とだけ説明されている¹⁸。このように、ブリーナの中での「тавлеи」もしくは「тавляя」が何を指しているかは明確ではないが、映画の中ではチェスで勝負が行われており、サイコロは使われていない。映像の中では、チェス盤もコマも、いずれも金色ではなく、золотыеという形容語が浮いてしまっているが、No.42のブリーナでも Со золоты тавляямиという表現が使われており、映画がこのブリーナを利用したという推定の傍証とみることができる。

3-12 場面⑭: フェニックスを手に入れるが、「幸せの鳥」ではないとわかる。「幸せ」を求める旅を断念し帰郷を決める

インド王の鳥「フェニックス」は、人間の顔を持ち、人間の言葉を話し、催眠術をかける能力をもった妖鳥であった。王は、鳥がサトコーたちを眠らせた頃を見計らって彼らを始末しようと目論むが、サトコーはグースリを鳴らして催眠術を破り、これは自分たちが探している「幸せ」ではない、と断じるが、鳥を連れて王宮を出る。王が差し向けた追っ手を眠らせるよう鳥に命じ、大軍勢が眠っている間に船出する。

その後、海の上でクジマーが次のような歌を歌う¹⁹。

Ох, и тяжко мне, добру молодцу,	わたし、若者には辛いことだ
Без родного отца, магушки.	生みの親、父母と共にいないのは
Далеко пролегла дороженька,	道は遠くへと続いていた
Не свернуть, не сойти, не съехати.	戻ることはない 歩いても 馬でも
А и где ж отыскать ту дороженьку,	どこで探せばよいのだろう
Что к родимой ведет сторонушке.	ふるさとへと続く道は
Ах, родимая ты сторонушка,	ああ、ふるさとよ
Как же без тебя прожить...	ふるさとを離れて どう生きればいいのか

これを聞いてサトコーもリュバーヴァを思い(彼女の顔が背景に大写しとなる)、次のようにいう。「Обманул старик, нет за морями счастья. Ставь паруса шелковые! Поворачивай носы к родной стороне. (爺さんは嘘をついたんだ、海の向こうに幸せはない。絹の帆をあげろ！ふるさとへ舳先を向けるんだ)」²⁰

クジマーが歌う望郷の歌は、フォークロアの語彙を用いてはいるが、ブリーナの中には見られないものである。この人物はオペラにも登場せず、映画独自の設定で、この歌も映画のために作られたものであろう。サトコーが鳥を探す旅は映画の創作なので、これを断念することも創作である。また、ブリーナのサトコーが、帰国の途につくよう命じることもなく、映画だけのものである。サトコーの旅の「目的」については後述するが、少なくともその一つであった「幸せ(の鳥)を探すこと」はここで明確に終了となり、これ以降の旅の目的地はノヴゴロドとなる。

3-13 場面⑮: 船団が大嵐に巻き込まれ、サトコーは自らグースリと共に海に沈む。海底で海の帝夫妻に出会い、歌と演奏を聞かせる。皇女との結婚を命じられるが、皇女に助けられて海底から地上へ逃れる

この場面は、映画でもオペラでも最大の見せ場となっているが、ブリーナとの関連が最も強いところでもある。映画では、サトコーが帰国を命じて赤い帆を上げると、それを待っていたかのように海が荒れだす。危険を感じてサトコーはこう言う。「Дружина моя храбрая, много по морям мы плавали. А про дань царю морскому

забыли. Видать, осерчал царь. (勇ましい従士たちよ、我らはさんざん海を航海してきた。しかし海の帝への貢物を忘れていた。見てみろ、帝がお怒りだ) 従士の一人が「帝は人柱を求めているようだ」と言うと、サトコーは「Что ж, братья, я вас по морям водил, мне и ответ держать. (みんなを海に連れてきたのは自分だ、責任も自分がとる)」と言う。仲間は「ばかなことを言う。喜びを分かち合ってきたのだから、苦労も分かちあおう」と反対し、「Жребий надо метать. На кого выпадет, тот и пойдет. (くじを撒こう。くじに当たった者が行けばいい)」と提案する者が出て、賛同の声が上がるのだが、サトコーはこう言う。「Я должник морского царя. Видать, пришел мой черед. Сослужите, побрательнички, последнюю службу: киньте на воду дощечку кипарисовую, да гусельки дайте яровчатый. (自分は海の帝に借りがある。自分の番が来たのだ。最後のつとめを果たしてくれ。水にイトスギの板を投げてくれ、よく響くグースリをくれ。)」そして、「Не плачь, Ивашка. Не помер Садко, значит, жив еще. Может, и свидимся. Поклонитесь люду новгородскому и желанной моей. Не поминайте лихом! (泣くな、イワーシカ。サトコーは死んだわけじゃない。つまりまだ生きている。また会えるかも知れないさ。ノヴゴロドのみんなと私の恋人に挨拶してくれ。私がした悪いことがあれば、忘れてくれ!)」と言い残して船を離れる²¹。

サトコーのブリーナ 27 編のうち、No.31 と No.53 を除く 25 編で航海が描かれているが、そのうちの 22 編で、サトコー(もしくは主人公)の船は海上で「突然止まる」ことになっている。「止まる」というモチーフがないのは、航海のない No.31, 53 と、No.36, 41, 52 だけで、大部分のブリーナでは、船が動かない、という不思議なことが起こって、その原因を調べる、あるいは何らかの対策をすることが必要になっている。この停止の前後に、嵐などの船の危機が歌われているのは、No.27, 28, 29, 47, 52 の 5 編に過ぎず、大部分のブリーナでは、船はただ単に止まってしまうのである。海上で嵐に遭遇するのはいわば当たり前のことで、ブリーナのサトコーは、不可思議なトラブルに遭遇した、というところがポイントなのだが、映画ではそれを採用せず、嵐だけに止まったわけである。長い間航海をしていれば、嵐には何度も遭遇したはずだと思われるが、この場面のやりとりだけを見ると、まるで初めて遭遇した嵐であるかのようで不自然である。

また、仲間から提案され、サトコーが一蹴する「くじ」も、ブリーナでは大切な要素である。「船が動かなくなる」22 編のうち 17 編に、くじを作って人柱を選ぶ、という場面がある。この場面の重要性は、第 2 章で訳出した No.42 では、全体の約 21%が「くじ」のモチーフとなっている²²ことにも見ることができるが、No.34 のように、何度もくじを作り直し、その場面だけで 60 行にわたってしまう場合すらある。

「くじ」の場面が長くなるのは、ブリーナのサトコーはくじの結果に納得せず、何度もやり直しを行うからである。「くじ」が登場する 17 編のうち、「やり直し」が行われるのが 11 編で、実に 6 割以上のブリーナで、サトコーは自分に当たったくじをやり直させている。何度試みてもくじの結果はサトコーを指すので、ついに船から海中へ、という流れになる。やり直しの回数が多ければ多いほど、サトコーの往生際の悪さが強調されることになり、ヒーローらしさが減じられるとも言えるが、誰も自分の命は惜しいものだ、という人間らしさを描いているとも言える。

映画でくじが行われなかった理由が、主人公サトコーの人間像から「往生際の悪さ」を排除するためであったらうことは、容易に推察できる。しかし、「くじ」は上述のようにブリーナでは非常に大切な要素である。会話の中でこのような形で出すだけではなく(ブリーナに触れたことがない映画視聴者は、この台詞にほとんど注意を向けないか、あるいは分かりにくい細部として聞き流してしまうものと思われる)、たとえばオペラのように、一度くじを行い、その結果サトコーが選ばれ、サトコーはそれを潔く受け入れて海中へ去る、という演出にすべきだったように思われる。

また、サトコーが仲間に向かって使う「ответ держать」という表現は、ブリーナに伝統的なものである。サトコーのブリーナでは No.31 と No.34 の中で、それぞれ一回ずつ使われている²³が、筋や採録地を問わず、頻繁に出くわす表現である。しかし、ブリーナの中では、問いかけに対して「答える」という意味で使われているのに対し、映画のこの場面では「答える」では意味が通らず、「責任をとる」と解釈せざるを得ない。ブリーナの

中では「責任をとる」という意味で使っている例は見当たらず、映画に入れる際に、ブリーナの用語をよく吟味せずに使ってしまったということになる。

サトコーが船から降りるとき、映画では「киньте на воду дощечку кипарисовую(水にイトスギの板を投げてください)」と指示しているので、「イトスギの板」に乗っているものと思われる。一方、ブリーナでは、サトコーの前に出されるのは「オークの板」(No.27, 28, 33)、材質不明の「板」(No.29, 34, 37, 52²⁴)、「ボダイジュの板」(No.30)、「白い／軽いボート」(No.32, 39)、「はしご」(No.35)、「漕ぎ手の座席」(No.38)、「タラップ」(No.42)、「オークの丸太」(No.40)、「クリスタルの樽」(No.44)、「オークの櫃」(No.45)などさまざまで、定まっていなくて、イトスギの板は一例もない。「кипарис(イトスギ)」自体は No.34 と No.45 に登場している²⁵が、どちらもくじの材料であって、サトコーが乗るためではない。この点もまた、ブリーナの用語の不適切な使用の例となっている。

サトコーが海底の王国に到着すると、そこでは海の帝と皇妃が口論をしている。「На земле золото дороже булат-железа。(地上では鋼鉄より金(きん)のほうが高価だ)」「Ах, нет, булат-железо дороже。(あら、違います、鋼鉄のほうが高価ですよ)」「Нет, золото!(いや、金だ!)」「Нет, железо!(いいえ、鉄です!)」²⁶このやりとりは次のようなブリーナに由来するものであろう。

— Ай же ты, Поддонный царь,
Зачем ты меня сюда требовал?
Говорит Поддонный царь:
— Я затем тебя сюда требовал:
Ты скажи-скажи и поведай мне,
Что у вас на Руси есть дорогого?
У нас с царицею разговор идет,
Злато или серебро на Руси есть дорого,
Пли булат-железо есть дорого?

「水底の下の帝よ、
なぜ私を求めたのですか？」
水底の下の帝はいう
「お前を呼んだのはこういうわけだ
教えてくれ
ルーシで高価なのは何か？
皇妃と話しているのだ
ルーシで高いのは、金銀なのか
それとも鋼鉄が高いのか？」

(No.34, 140-145)

а царь морьской да страх людской
А со царицей морьской да спорують:
— А ведь Садке-купецъ да богатыи
А разбери-тко ты, рассуди-тко ты, —
А для того твои кораблики поставили, —
А что на Руси дороже да ценитсе:
А ценитсе дороже злато и серебро
65 Али медь, булат-железо-то?

海の帝 人間の恐怖は
海の皇妃と争っている
「豊かな商人サトケよ
考えて判断しておくれ
そのためにお前の船を止めたのだ
ルーシでは何が高価なのか
金と銀に高値がつくのか
それとも銅か、鋼鉄か？」

(No.35, 58-65)

サトコーが海の帝に会う、という場面を持っているブリーナは 17 編 (No.27, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 42, 43, 44, 45, 46) だが、このうち、皇帝が皇妃あるいは妻と争うのは 3 編 (No.34, 35, 45) のみである。この 3 編では、海の帝はその仲裁のためにサトコーを呼んだことになっているが、No.45 の争いは以下のような内容である。

Морской царь требует его к себе. Роздор у его с женой идет: один-то толкует [одно], а другой — 海の帝が彼を求めている。妻との間で争いになっている: ひとりはいこう言い、もう一人は別のこ

другое. «Как закатитце красно солнышко: за воду とを言うのだ。「太陽は水に沈むのか、地面に
или за землю?» 沈むのか?」

(No.45)

No.34 および 35 の「争い」について、「ノヴゴロドのプリーナ」では次のように解説している。「サトコーが、ルーシで高価なものは何か、という口論を解決するというエピソードは、『三つの良い助言』という昔話から持ち込まれたものである。」²⁷また、この昔話はカレリア地方のもので、そこに登場する皇帝が水の底のさらに下に設けられた宮殿に暮らしている、ということをもふまえて初めて「Поддонный царь (水底の下の帝)」という用語が理解できるという。また、No.45 では争いの内容が異なっているが、歌い手 A. B. Марков が、カレリアの昔話をふまえて創作したものではないか、と推定している²⁸。映画ではこれに続いて、海の帝が皇妃の父の力で権力を得たのか否か、サトコーが持っている楽器がグースリであるのかドームラであるのか、をめぐっても口論が行われるが、こちらはプリーナには例がなく、帝と皇妃をより喜劇的に描くための、映画だけの創作と考えられる。

海の中での出来事はプリーナによって少しずつ異なっている。「皇帝がサトコーに演奏を求め、サトコーはそれに応じるが、演奏のせいで嵐が発生し、聖人が現れて演奏をやめさせる。その後、帝はサトコーに妻を選ぶよう命じるが、選び方について助言する者が現れ(演奏を止めさせる聖人と同一人物の場合もある)、助言に従うことで帰郷できる」という流れを持つものが多いが、上述の 17 編のプリーナを整理すると以下ようになる。

No.	帝の呼び名	帝の命令	演奏の停止	結婚の理由	帰郷の援助
27	царь морской	演奏・結婚	聖人	帝が命令	聖人
28	царь-то морской	演奏・結婚	聖人	帝が命令	聖人
29	царь морской	演奏	聖人	聖人が助言しサトコーが希望	聖人
30	царь	演奏	天からの声	演奏の褒美	娘の一人
32	царь морьской	演奏	聖人	演奏の褒美	結婚相手が帝に依頼し船を用意
33	царь Водяник	演奏	修道僧	(なし)	帝が船に乗せる
34	Поддонный царь	仲裁・演奏・結婚	皇妃	帝が命令	皇妃
35	царь морьской	仲裁・演奏	聖人	(なし)	聖人
36	поддонный князь	演奏	聖母	聖母が助言しサトコーが希望	聖母
37	морской-от царь	結婚	(なし)	帝が命令	老婆
38	царишко Поддонишко	結婚 ²⁹	(なし)	帝が命令	老母
39	царь морской	帝を楽しませること	サトコーは自分で気付く	(なし)	帝が怒り、サトコーを放り出す
42	царь морской	演奏・結婚	聖人	帝が命令	聖人
43	морской царь	(断片で、帝に会う前に終わっている)			
44	морской сар	結婚	(なし)	帝が命令	帝が追い出す

45	морской царь	仲裁・結婚	聖母	帝が命令	聖母
46	царь морской	(演奏)	サトコーは自分で気付く	(なし)	帝が追い返す

表3 海中でのサトコー

このように、ブリーナでもグースリの演奏が求められることが多いが、すべてというわけではない。また、帝が提示する花嫁候補との結婚(命令であることも、褒美であることもある)が帰郷のきっかけになることが多いが、このモチーフを持たないものもある。

映画のサトコーが、陸上の人間でありながら溺れることなく海中で活動できること、その不可思議について何も言及されないことは、ブリーナを踏襲している。口論の仲裁を求められたサトコーが、「ご夫婦の争いにどうして口を挟めましょう。尊き帝と皇妃のために歌を演奏するほうがよいでしょう」と回答を避けるのは、現代的ともいえる対応で、映画の創作である。サトコーの演奏に喜んだ皇帝夫妻が踊り、それによって嵐が引き起こされる、というのはブリーナを踏襲しているが、映画では、この直前に描かれていた嵐(サトコーが船を降りるきっかけとなったもの)と続いているのか、別の嵐なのかが分かりにくくなっており、構成上の失敗のように思われる。また、映画の中でサトコーに嵐を知らせるのは、リュバーヴァが飛ばした白鳩である。サトコーが船を降りて、海底の宮殿に着くまでのあいだに、故郷で待つリュバーヴァが鳩を飛ばすシーンがはさまれているが、言うまでもなく映画の創作であって、ブリーナに由来するものではない。ソビエト時代の映画であり、聖人や聖母を登場させるのを避けたかったことは十分に理解できるが、この鳩については、見る者は誰も、いささか都合がよすぎるという感想をもつのではないだろうか。続いて、自分の演奏によって嵐が起こっていると知ったサトコーは、ブリーナと同じようにただちにグースリの弦を切り演奏を中断する。驚く皇帝夫妻に向かって「弦を手に入れるために地上に戻りたい」と申し出るが、皇帝夫妻がサトコーの企図を簡単に見破る、というやりとりは映画の創作である。これに続いて皇帝がサトコーに、「妻を選べ」と命じるのは、上述のようにブリーナに基づいている。皇帝夫妻の命令に続いて、妙齢の娘たちが列をなして現れるが、その中の一人としてイリメニ姫が登場するのは、映画の創作である。しかし、花嫁候補の一人がサトコーに自分を選ぶように言い、それによってサトコーの帰郷を助けるのは、No.30 の一例のみではあるが、ブリーナに基づくモチーフといえる。イリメニ姫の「私を選ぶといいなさい」というささやきに、サトコーは「しかし結婚はできない」と答える。姫は「約束するだけでいいの。もう一度助けてあげるから」と言う。このやりとりは映画の創作である。サトコーがイリメニ姫を選んだことを告げたときに、帝が驚いて「Эту не отдам, это моя любимая дочка. Другую бери. (だめだ、最愛の娘なのだから。別のを選べ)」と言うのは、やはり一例ではあるがブリーナの「Тут ведь царь-от стоит да испугаитце: / — Не своим ты, Садко, умом, верно, наказаной, / Не отдам я за тебя свою-ту доць любимую: (すると帝は驚いて立つ / 「サトコー、自分の知恵ではあるまい / 最愛の娘はお前の嫁にはできない)」(No.32, 118-120)と関係があると見るべきであろう。サトコーの返答に帝が怒るのに対し、イリメニ姫が「母に頼んで」とささやくこと、母である皇妃が帝への対抗心から結婚を認め、帝が悲しむこと、などは映画の創作である。このように、この場面では、ブリーナに由来する要素と映画独自の要素が細かくつなぎ合わされている。

結婚を認められた後、サトコーはイリメニ姫の助けによって逃走し、帝の追跡から逃げおおせて帰郷を果たす。この場面も、帰郷という結果以外は完全な創作であるが、イリメニ姫との次のような会話は、きわめて現代的であるとはいえず、創作の中でも最も成功している部分であろう。「Зачем велела обмануть отца своего? Не могу я жениться. (父上を騙せとはどういうことだ? 私は結婚はできないのに)」「Знаю, что не мила тебе, да ведь я люблю тебя. (知っているわ、私を愛していないことは。でも私は愛しているの)」「Не волен я в сердце своем, земной я. Ты уж прости меня, грешного. Что поделаешь, не судьба нам. (心苦しいが、私は地上の者だ。どうか罪深い私を許してほしい。どうしようもない、そういう運命なんだ)」「А может, управисься с сердцем? (心は

変わらない?)」「Нет, не смогу.(変えられない)」「И надо бы рассердиться на тебя, да невмочь. Видно, и вправду говорят, сильна любовь. Чего ж теперь ты хочешь?(あなたに腹を立てるべきなんでしょうけれど、できないのよ。きっと、それほどあなたを愛しているのよ。何をしてほしい?)」「Воздуха вольного хочу. Помогги, царевна, в Новгород добраться.(自由な空気がほしい。助けてくれ、皇女様。ノヴゴロドへ帰りたい)」「Что ж... пойдём.(わかったわ、行きましょう)」³⁰ 「Скачи, Садко. Нет резвее этого конька во всем морском царстве.(行きなさい、サトコー。このタツノオトシゴは、海の帝国で一番速いから)」「Спасибо, царевна.(皇女様、ありがとう)」「Прощай, не свидимся мы больше с тобой.(さようなら、もう会うことはないわね)」「Прощай, царевна.(さようなら、皇女様)」「Скачи, не то раздумаю.(行きなさい、気が変わってしまうかもしれないでしょ)」³¹

3-14 場面⑩:ノヴゴロドへ帰り、リュバーヴァや船団と再会する

サトコーはノヴゴロドに上陸し、大地にひれ伏した後、リュバーヴァが待つ高台へまっすぐに向かって再会を果たす。この部分は言うまでもなく映画の創作であるが、その背後に、ノヴゴロドへ近づくサトコーの仲間の船が描かれ、やがて入港の場面となる。船はノヴゴロドの人々の大歓迎を受ける。沈んだ様子の乗組員たちに「サトコーはどこだ?」という問いが投げかけられたところへサトコーが登場し、人々にも乗組員にも歓喜で迎えられる。

海上で船から降りたはずのサトコーが、船よりも先に帰郷していて、自分の船を出迎える、というモチーフは、No.27, 28, 29, 38, 42 の 5 編のブリーナにみられる。海の帝国へ行ったサトコーは、少数の例外を除いて無事に帰郷できるのだが、「自分の船を自分で出迎える」のはこの 5 編のみである。このうち、No.29, 38 は非常に簡潔だが、No.27, 28, 42 では情景が細かく描かれている。映画にはこれらのブリーナが利用された可能性があるが、直接的な影響を与えたのはオペラとみなすのが妥当であろう。

場面⑩は、サトコーと町の住人との、次のような対話で締めくくられている。「Нашел счастье, Садко?(幸せを見つけたかい、サトコー?)」「Нашел.(見つけたよ)」「Где ж оно?(どこにあるの)」「Вот оно! Тридевять земель обошел, на дне морском побывал, а ничего нет краше земли родной! Вот оно, наше счастье!(ほら、これだ! [ノヴゴロドの街を示しながら]3 の 9 倍の土地を歩き回って、海の底にも行ってみたが、故郷より素晴らしいものはなかった! これこそ我らの幸せなんだ!)」³²

4 まとめ

3-4 で述べたように、サトコーの旅の目的は、映画の中では「ノヴゴロドの名声を高めるため」とも、『『幸せ(の鳥)』を探するため」とも語られて明確ではなかったが、前者は場面③を最後に言及されなくなり、「幸せ(の鳥)」が唯一の目的となった感がある。おそらく、映画全体を通じて最大の欠点となっているのが、少なからぬ資金を費やし、自らの生命を危険にさらし、愛する者に長い別離を味わわせるなど、大きな犠牲を払って実行される旅の、目的の無意味さである。目的に意味がない以上、当然の帰結ではあるのだが、成果を挙げられないまま突然目的を断念することも、クライマックスの場面で、「幸せは故郷にある」という極めて陳腐な結論を語ることも、この欠点をさらに拡大し、サトコーの人物像を損なっている。

ブリーナのサトコーの旅の目的は交易だが、オペラのサトコーは、商売で利益を上げ、世界中でノヴゴロドの名声を高め、利益で故郷に立派な教会を建て、聖像を宝石で飾りたい、という夢を語っている。この夢に、海の帝王の娘への憧れが加わり、姫からの後押しを得て船出に至る、という設定は、十分に共感を得られるものだといえよう。映画のサトコーの場面③の宴会における演説は、オペラと趣旨が似ており、映画製作者もまた、二つの「目的」のあいだで迷いがあつたのか、と思わせるが、「幸せの鳥」を選択することで、オペラとは違うサトコー像を作ろうとしたものであろうか。残念ながら、この選択は失敗だったといわざるを得ない。

もちろん、ブリーナを忠実に映像化することが常に望ましいとは限らず、映像化にあたっては、伝承されてきた作品がもつ矛盾や、現代人の感覚に合わない部分の改変は、必要に応じて行われるべきであろう。映画「サトコー」においても、場面⑮のように、ブリーナの要素を巧みに利用しつつ、見ごたえのある情景を作り上げているところもある。その一方で、サトコーとリュバーヴァ、イリメニ姫の三角関係の矛盾や、商人たちとの「賭け」をめぐる状況、「幸せの鳥」などの大きな欠点は、ブリーナやオペラから離れようという試みから生まれているようにも思われる。原作であるブリーナや、先行作品であるオペラをより深く研究し、利用すべきものを十分に吟味した上で、新機軸を盛り込めば、もっと魅力的な作品となったであろう事が惜しまれる。

歌い手が、古語や意味不詳の語を含むテキストを、単調なメロディーに乗せて長い時間をかけて歌い、聞き手はそれにひたすら耳を傾ける、という伝統的な形でブリーナを鑑賞することは、たとえ歌い手がいたとしても、現代人には困難である。ブリーナを題材とする映像作品の役割が小さくなることはないであろう。よりよい作品が作られ、その作品が愛されることは、ブリーナの運命にとっても重要なことだといえる。これから行われるであろう新たな映像化にも、引き続き期待を寄せながら着目していきたい。

文献・資料

[日本語文献]

井桁貞敏 1974. 『ロシア民衆文学 中』三省堂.

中村喜和 1992. 『ロシア英雄叙事詩 ブリーナ』平凡社

中村喜和 1994. 『ロシア英雄物語』平凡社

セリバーノフ, フォードル(編著) 1998. 『ロシアのフォークロア』金本源之助監訳 早稲田大学出版部

佐藤靖彦 2001. 『ロシア 英雄叙事詩の世界』新読書社

[ロシア語文献]

Гильфердинг А. Ф. (1949-1951) Онежские былины, записанные А. Ф. Гильфердингом летом 1871 года. Ответственный редактор: А. М. Астахова. изд. Академии Наук СССР. т.1-3.

Даль, В. И. (1912) Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля. Четвертое, исправленное и значительно дополненное издание под редакцию проф. И. А. Бодуэна-де-Куртене. Издание Т-ва М. О. Вольф. (Reprint 1984)

Древние российские стихотворения, собранные Киршею Даниловым. (1977) «Литературные памятники». Ответственный редактор: Л. А. Дмитриев. изд. Наука.

Новгородские былины. (1978) «Литературные памятники». Ответственный редактор: Э. В. Померанцева. изд. Наука.

Рыбников Н. П. (1989-1990) Песни, собранные Н. П. Рыбниковым. В 3-х томах. Том 1, 2. изд. Карелия.

Селиванов Ф. М. (1990) Художественные сравнения русского песенного эпоса. Москва, Наука.

Словарь русских народных говоров. вып.43 (2010) Санкт-Петербург, Наука.

Соколов Ю. М., Чичелов В. (1948) Онежские былины. изд. Государственного литературного музея. Москва.

[DVD]

Sadko (2003) DVD. RUSCICO. Director: Aleksandr Ptushko.

¹ 本稿の前半「映画『Sadko(サトコー)』とサトコーのブリーナ(1)」は、国際地域研究論集第5号(2014)に収録されている。

² 新潟県立大学国際地域学部

³ Sadko, 0:23:11~0:23:33

⁴ Новгородские былины, с.397

⁵ Sadko, 0:24:50~0:25:00

-
- 6 Sadko, 0:32:30~0:32:52
7 Sadko, 0:34:17~0:35:24
8 Sadko, 0:38:58~0:39:31
9 Sadko, 0:39:12~0:39:27
10 Новгородские былины, с.405
11 No.21 の Василий Буслав в Иерусалим ездил(ヴァシーリー・ブスラエフはエルサレムへ行った)、No.24 の Василий Богуславьевич(ヴァシーリー・ブスラヴィエヴィチ)、補遺 II No.5 の Здунай [Три окуня златоперые](ズドゥнай[3匹の金の鱭のスズギ])には、数行の船の描写があるが、使われている表現は 3 箇所ともほぼ同じで、хобот(ы) мечет по-змеиному(尾は蛇のようにうねる)である。
12 Гильфердинг 集を例にとっても、No.9, No.20, No.85, No.152, No.159, No.218, No.225 などに見られる。
13 Sadko, 0:55:29~0:55:31
14 Новгородские былины, с.215, No.42:61 行目
15 研究社露和辞典 p.2295 なお、「岩波ロシア語辞典」で与えられている語義もほぼ同じである。
16 Даль(1912), т.4, с.709
17 Новгородские былины, с.448
18 Словарь русских народных говоров. вып.43 с. 209
19 Sadko, 1:08:09~1:09:27
20 Sadko, 1:09:33~1:09:45
21 Sadko, 1:11:04~1:12:17
22 「映画『Садко(サトコー)』とサトコーのプイリーナ(1)」(国際地域研究論集第5号(2014)), p.120 参照。170 行のうち 35 行を占めている。
23 No.31:37 行目、No.45:180 行目参照
24 No.52 では、サトコーは船の難破によって海に落ち、板をつかむことになっている。
25 No.34:99, 104, 105 行目および No.45(散文)第三段落参照
26 Sadko, 1:14:12~1:14:20
27 Новгородские былины, с.406
28 Новгородские былины, с.414
29 帝はサトコーに向かって「生きたまま飲み込もうか？焼き殺そうか？嫁を取らそうか？」と言う。
30 Sadko, 1:19:18~1:20:14
31 Sadko, 1:20:23~1:20:36
32 Sadko, 1:23:37~1:23:58